

第 80 話 (64 頁) おサルとえんどう豆

おサルさんが両手にいっぱい、えんどう豆をもって歩いていました。豆がひとつぶピョンととびだしました。おサルさんはひろおうとして、20 つぶこぼしてしまいました。おサルさんは、あわててひろおうとして、ぜんぶ落としてしまいました。そこではらを立てたおサルさんは、えんどう豆を投げちらかして、走って行ってしまいました。

「単純で短くて分かりやすい。子どもたちにもすっと入っていく話だよ。」

「えんどう豆が、おサルさんの両方の手にいっぱい。歩いているうちに何のはずみか、一粒だけ落ちちゃった。」

『ピョンととびだしました』だって。この和訳、とても感じが出ている。」

「身体をかがめて拾おうとしたら、20 粒、こぼしちゃった。」

「それで、また拾おうとしたら、今度は全部、手からこぼれちゃった。」

「かがめるサルと、手からこぼれるえんどう豆。その動きがテンポ良く、繰り返して表現されている。動画を見ているみたいだ。」

「続きも、そうだ。怒ったサルは腹いせにえんどう豆をもっと散らかし、走って立ち去った。」

「短気は損気、というわけか。このサル、かんしゃくを起こして、もう見境も何もない。最近の言葉では、切れてしまった。」

「慌てると失敗するから、何でも落ち着いてやりなさい、と…」

「最初の一粒なんか、無視すればよかった。そうしたら、こんな取り返しのつかない結果にはならなかった。」

「きちんと 20 粒と、ここだけ、どうして数字が特定されているのかな。」

「ウーン。確かにサルが自分で数えたわけじゃない。ロシアでは 2 がよく基数として使われるので、その 10 倍ということか。あるいはフランス語は 20 (vingt) が数え方の一つの基準なので、その影響なのか。」

「書いてないけど、もともとえんどう豆はいくつぐらいあったのだろうか。少なくとも 100 ぐらい、あるいはもっとずっと多いか。」

「えんどう豆をさやから抜き取ったのは、まさかそのサルじゃない。お百姓さんか誰かが、さやから抜いて積み上げていたのを、かすめてきた。」

「両手に持ったままで、どういう姿勢をしたら、落ちたえんどう豆を拾えるのか、見当がつかない。そんなこと不可能じゃないかな。」

「全部こぼした後で、また全部を拾い上げるというオプションもあったのに、かっかして思いつきもしなかった。」

「いろいろ、想像を膨らませて考えられるね。」

「ところで、アーズブカでサルが登場するのは、この話だけみたいだ。」

「フーン。その理由は分からないけど、えんどう豆って、人類は1万年ぐらい前から食料に  
してきたんだって。ロシアにはゴロホヴェツという、えんどう豆に由来する名前の都市があ  
るというから驚くよ。」